

湊川神社 多聞通3丁目

●「多聞通・橘通・楠町」の由来



この神社は湊川神社というよりむしろ、「楠公（なんこう）さん」という名で呼ばれ親しまれている。「楠公さん」とは南北朝動乱期の1336（延元元）年、湊川の戦いで戦死した楠木正成（くすのきまさしげ）のことで、そのほか一族17人と菊池武吉卿の霊を祀る神社であるが、創建は新しく、明治に入ってからである。この地は後醍醐天皇方の楠木正成が足利尊氏軍と戦った湊川の戦いの中心地であり、正成らが今はこれまでと自刃した場所でもあった。なお現在、本殿の西側奥に「史蹟 楠木正成戦歿（せんぼつ）地」の碑が建てられている。また、江戸時代に水戸藩主徳川光圀が楠木正成（大楠公）の墓碑「嗚呼忠臣楠子之墓（あちゅうしんなんしのはか）」を建立した地でもある。光圀の建てた大楠公墓碑には、幕末になると勤皇の志士たちが立ち寄り、尊皇の決意を新たにし、それ以後一般にも崇拜されるようになったという。

1864（元治元）年、鹿児島藩主後見役の島津久光が、大楠公の社を湊川のほとりに建てたいと進言し、また1867（慶応3）年には尾州藩主徳川慶勝（よしかつ）が、京都での建立を進言した。王政復古の号令で江戸幕府が滅亡し、明治維新政府となり、このあたりは兵庫鎮台をへて、兵庫裁判所の管轄下に入るようになった。その時、のちに初代兵庫県知事となる伊藤博文らが裁判所総督の東久世通禧（ひがしくせみちとみ）に対し、楠公墓碑の地に神号を賜わるよう計ってほしいと働きかけたのであった。そうした努力が実り、明治天皇の命で、1872（明治5）年に別格官幣社として湊川神社が創建されることになったのである。社殿の造営にあたっては、水戸家の徳川慶篤（よしあつ）が工事を水戸家で請け負いたいとの申し出もあったが、結局は一般の寄進によることとなった。社号については「楠神社」「大楠霊（おおくすたま）神社」という説もあったが、結局「湊川神社」で落ち着いたのである。1934（昭和9）年に社殿の大改築が行われたが、1945（昭和

湊川神社 多聞通3丁目

20)年の空襲で焼失してしまった。現在の本殿と拝殿は1952(昭和27)年に建てられたもので、当時としては神社建築にコンクリートを取り入れるという画期的なものであった。

なお、神社の所在地「多聞通」や周辺の「橘通」「楠町」はいずれも楠木正成にちなんで付けられた地名である。多聞は楠木正成の幼名・多聞丸(多聞)から、また、橘は楠木氏が橘姓を称していたことから付けられたものだった。

場所：神戸市中央区多聞通3丁目1-1

◆「楠木正成戦歿地」の碑(湊川神社境内)

湊川神社の本殿西側奥にある碑。

1336(延元元年)5月25日南北朝動乱期の中心的戦いである、湊川の戦いがこの付近一帯で戦われた。後醍醐天皇方の楠木正成軍はわずか700の軍勢で6時間も奮戦したが、結局足利軍に敗れ、正成は弟の楠木正季(まさすえ)らとともに湊川北の民家にこもり自刃した。そして、正成、正季ら28人が自害したその場所がこの碑のある付近だと伝えられてきた。楠木正成・



「楠木正成戦歿地」の碑

正季兄弟は刺し違えて果てるのだったが、その間際、正季が兄正成に「七生まで、ただ同じ人間に生まれて、朝敵をほろぼしたい」と言った『太平記』のくだりは有名で、「七度生まれて君が代を まもるといいし楠公の いしぶみ高き湊川 流れて世々の人ぞ知る」と鉄道唱歌64番の歌詞にもなっている。

◆大楠公墓碑(湊川神社境内)

湊川の戦いで自刃した楠木正成の塚と言われた小さな塚が、もともとはこのあたりの田畑の中にあった。江戸時代に入り、自領内に大楠公の塚があることを知った尼崎藩主青山幸利は、そこに梅と松を植え、五輪塔を建立し、大楠公の墓標にしたのであった。その後、この墓標を管理していた、楠木正成の熱烈なファンである広厳寺の千巖はそれ以上の立派な墓を建てられないものかと思案していた。そうしたところ、水戸藩主徳川光圀(水戸黄門として知られている)に大楠公の建碑の意志のあることを知り、千巖は江戸の水戸藩邸に出向き藩士の鶴飼金平(うかいきんぺい)に書を呈し、光圀に対し建碑の請願を行なうのであった。もともと光圀は朱子学を重んじ、自ら編纂した『大日本史』で南朝正統理論をとり後醍醐天皇を正統の天皇と認め、それに殉じた楠木正成を大

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

湊川神社 多聞通3丁目

いに評価していた。そうしたこともあって、光圀は千巖の請願をこころよく了解し、大楠公建碑の着手にかかったのである。1692（元禄5）年、光圀は家臣の佐々宗淳（介三郎）を兵庫湊川に派遣し、建碑工事の指揮にあたらせた。なお、この時工事にあたった石工（いしく）に住吉村（現東灘区）の権三郎の名が見られる。同年墓碑は完成し、碑の表には「嗚呼忠臣楠子之墓」の八文字が刻まれた。この字は光圀自らが謹書したもので、中国の「嗚呼有吾延陵季子之墓」にならったものである。そして、碑の裏には光圀の師・朱舜水が撰んだ大楠公賛美の文を刻んでいる。また、この墓石は亀の胴体から龍の首が出ているものの上にのせられているが、この形態を「螭首亀趺（ちしゅきふ）」と呼び、朱子学を志した者の墓の型式である。現在、国の史跡に指定されている。なお、墓碑の横に平櫛田中（ひらくしでんちゅう）作の徳川光圀の銅像が建てられているが、これは1955（昭和30）年に建てられたもので、水戸家に残る資料をもとに身長（五尺四寸<163.3cm>）から持ち物まで実寸で造られている。ちなみに、光圀はこの湊川の地には一度も訪れたことがない。



大楠公墓碑



徳川光圀像